

大平さんの遺書

遠藤 勝巳

国際文化会館理事長で私どもの大先輩である松本重治氏は、大平首相の死を悼んで「いまの日本にとってかけがえない人を失った」といわれた。大平首相にとって松本氏は外交面でのいわば「師」であった。

だが、その大平首相も田中内閣で二度目の外務大臣を務めた時は、日中正常化という歴史的な事業を田中首相とともに成し遂げたものの、さらに日中航空協定交渉に移ってからは、自民党を二分する政争に巻き込まれ、恐らく政治家大平にとって最大のピンチに立ったのではないかと思つ。同協定に反対する右翼が身辺をつけねらい、当時の大平外相の苦渋に満ちた顔はいまでも目に浮かぶ。

日中正常化が達成されても、日中間を結ぶかけ橋ができるかどうか、正常化に反対する勢力は航空協定の阻止に全力をあげた。首相に就任してから大平節の「アー」「ウー」は有名だったが、私も新聞記者にとって大平流の持ちようなような抽象的表現を解読するには相当な年季がいった。しかしいったんハラが決まると、その記者会見の談話などは簡にして要を得、そのまま記事になったのを覚えてゐる。

日中航空協定交渉でいよいよ調印へ訪中する時の談話がそうだった。訪中する時の外相は意外と顔はさっぱりしていた。いままで香港、広州経由で七十二時間余りかかっていた北京への道が四時間に短縮される。もし日中航空協定が実現されていなかったら、正常化ができていても米中関係が先行して、日本は政治的にも経済的にも、また戦略的にも孤立していたに違いない。この協定締結後、日中関係は目に見えて緊密の度を加えていった。

航空協定が調印され、日中間に航空機が飛び交うようになったある日、たまたま志げ子夫人から当時のもようをおききする機会があった。「実は大平は遺書を書き残していったのです。いつ凶弾にあつて斃れるかもしれないからといって」。

大平外相の顔がさっぱりしていたのも、実は命を賭していたからだだったのかもしれないと思つたりした。いろいろ一部に批判はあるが、田中内閣による日中正常化はその後の日本の位置を決めたように思う。ロッキード事件で田中元首相が表面切つて政治活動をしくくなつてから、大平氏の立場は重要になつた。そして福田首相と自民党総裁のポストを争うことになつた昭和五十三年秋、当時幹事長だつた大平氏とわれわれの仲間が一夜めしをくう機会があつた。私どもは当然福田首相と争うことになるのを前提に大平幹事長の気持をききたかつた。

ところが、大平氏は憤然として、「君達は福田総理と争うことを前提にしているが、そんなことはない」と強い口調で不満を述べた。座はすっかり白けてしまつた。だがその謎は数日後解けた。どうやら福田首相は政権の禪譲を大平幹事長に約束していたらしいが、首相周辺の強い反対で結局決戦へともつれ込んだというのである。大平首相は思い通り総裁のポストについたが、この謎解きの真偽の程はとつとつき迷してしまつた。

総理大臣になられて昔のように浴衣がけで夜遅くまで話をする機会もなくなつた。そして政争に次ぐ政争に明け暮れた一年余り。経済摩擦に悩まされた日米関係も大平首相の手で軌道に乗つた。保守政権の命とりになりかねない日米関係の要が締められたことに、松本重治氏から冒頭の言葉が贈られたのであつた。

昭和五十五年、庚申の年の六月十二日午前五時すぎ、大平首相の魂は虎ノ門一帯の空気を震わせながら、大きな音とともに昇天していった。

(共同通信総務局長・元政治部長)